

イスラム様式のキオストロ

藤原 道夫

それはカルチャー・ショックを受ける出会いだった。ある年の春、もう 20 数年前のこと、シチリア島をめぐるツアーに参加し、パレルモ郊外のモンレアーレにある大聖堂を訪ねた。この聖堂はアラブ・ノルマン様式の代表的建築とされている。付属する修道院のキオストロ（回廊付中庭）に入った時だった、それまでに見たことのない空間が目の前に現れた。細めの二重列柱が尖頭型アーチを支える構造をとって正方形の中庭を取り囲む。列柱は一組ごとに金・宝石・色大理石などを用いた異なる幾何学模様で飾られている。片隅にある噴水を囲む列柱群をみた時はあまりの迫力に目がくらむ思いがした。中庭は芝生で覆われ、少しばかりの薔薇が植えられていた。

翌年春、単身でローマからパレルモに飛び、再びモンレアーレを訪ねた。丁度大聖堂内の結婚式が終わったところで、正面の扉が開き、新郎新婦が現れた。

当然キオストロにも入った。午後の強い陽射しを受け、列柱の様子は輝きを放っていた。夢中になって眺めては写真をとっていると、新郎新婦が入ってきて記念撮影が始まった。ここはうってつけの所なのだ。

翌朝、早めにモンレアーレに行った。大聖堂は開いており、内部壁面に飾られたモザイク画をじっくり観察した。小窓から入る朝日を受けて金や色ガラスの小片が煌く様はみとれるばかり。

キオストロはまだ開いていなかったが、掃除係のおじさんに声をかけると「入っていいよ」という返事、遠慮なく入れてもらう。上に青空が拡がり、小鳥の音が響きわたっていた。列柱群に朝日が当たって金や宝石をちりばめた幾何学文様がきらめき、まるで別世界に居る心地がした。噴水周りの石をこするブラシの音がここは現実世界であることを知らせてくれた。

数年後に、イタリアに詳しい講師同行のツアーに参加し、またもモンレアーレを訪ねた。この時アラブ・ノルマン様式の建築とイスラム様式の装飾について詳しく知ることができた。キオストロの列柱の輝きは前に見た通りだった。尤も 12 世紀末に造営されて以来基本的に変わっていないのだろう。訪ねる毎に魅せられる空間だ。